

Health Autonomy を目指して ー大学づくり ひとづくり 国づくりー

野田博之
医学専門学群

健康での問題って何があるの？

今回、私は健康についての提言を書きたいと思うのですが、筑波大学での健康の問題を考えていくと、表面上はほとんど問題なんてありません。しかし、じっくり見ていくと健康のみならず、さまざまな問題と根底でつながる、そして小手先の改革では解決できないような大きな問題が横たわっていることに気がつきました。さらに、その問題は筑波大学のみならず、日本の社会に大きく横たわる問題なのかもしれないと思い始めたのです。

さて、まず、筑波大学のことについて考えてみましょう。筑波大学にはどんな健康上の問題が残っているのでしょうか。大学で、健康づくりを考えるといっても、どのような方法が残っているのでしょうか。大方の手段はすでに取り残されているように見えるかもしれません。

大学の周りにはメディカルセンター、附属病院など大きな病院や医院が無数に存在

します。大学の中にはプールや陸上競技場、ウエイト施設などが完備され、スポーツなどを教えてくれる人もたくさんいます。無料で受診できる保健管理センターがあり、気軽に診療を受けることだって可能です。インフラとしての、保健や医療の質という点では相当高いレベルにあると思います。筑波大学の中にさえ、健康になる機会は無数に転がっています。

筑波大学には、体育や健康に関係するさまざまな授業があり、いろいろなことを学ぶ機会があります。また、さまざまな運動系のクラブがあるため、ほかの人と楽しく、運動をしていくことができます。

つくばにはこんなに健康になる機会がそろっているのです。どんな問題があるのでしょうか。

Health Autonomy

筑波大学での健康の問題、それは、Autonomy がないことだと僕は考えています。Health Autonomy、健康面での自

立、つまり自分自身の健康をどのようにしていこうかということを自ら決定し、行動していくことが足りないのです。それが筑波大学の「住民」の問題点ではないでしょうか。インフラや機会は十分すぎるほどあります。ただし、そのインフラや機会は十分に生かす人が少ない。インフラや機会はあのに、それを生かす人が少ないから、結果としての健康もそれほどは上がってこないのです。このAutonomyの不足こそが筑波大学の健康上の問題なのです。

しかし、このHealth Autonomyが足りないことは何も筑波大学の「住民」だけに限った問題ではありません。たぶん、日本の住民、つまり日本に住む人の多くが当てはまる問題だと思います。例えば、「健康日本21」って知っていますか。詳しくは各自で調べて欲しいのですが、この健康日本21で重要な点、それは健康というものを管理増進していく主体が行政や医療従事者から住民個人に移っていくところだと私は思います。日本には、健康になるための手段はそろえられています。いろいろなところに病院やスポーツジムなどがあり、しかもそれほどお金もかからない。行政だっていろいろな健康増進のための活動をしています。だけど、それを本当に有効に活用している人

はどれだけいるのでしょうか。

今まわりにあるものを活用して自ら健康になろうという人がまだまだ少ない。道具があってもそれを活用する人が少ないから、より多くのひとの健康に結びつきにくい。これが日本の健康の問題なのかもしれません。

だけど、これは健康の問題だけではない、日本のあらゆる問題の根底にあるものではないかとも、最近、思い始めています。

幸運なことにもいろいろな人と話す機会があるのですが、そこである人に言われた言葉が、胸に刺さります。「最近の若いやつらは馬鹿だ。何で自分たちの可能性を信じない。なぜ、自分たちで社会を変えていこうと考えないんだ。」

私たちは、自分の力を過小評価しすぎなのかもしれません。自分が動いたところで社会は変えられない。誰かほかの人が変えてくれるだろう。というような無気力な気持ちが世の中に蔓延しているようにも感じます。自分の力ぐらいでは何も変えることができないと諦めてしまっているのかもしれません。けれど、何か始めなければ、何も始まりません。可能性を信じて、自ら、一歩でも半歩でも、1ミリでもいいから、先に進みましょう。それこそがAutonomy。そして、そこから、社会は変わり始めるのです。

ただ、どのようにすればこの Autonomy を他人が影響を与えて、生み出すことができるのでしょうか。より具体的にいえば、どのようなことを大学がすれば、学生や教員などが Autonomy を持てるのか、自分が自分の問題を、大学の問題を、そして社会の問題を自ら変えていくような方向にパラダイムシフトさせられるのでしょうか。この Autonomy はあくまで、自ら内発的に変わることであって、人から言われて生まれてくるものではありません。難しい問題です。

シンクタンクを作ろう・そして、ひとを創ろう

それにしても今、日本の大学は大変な時代を迎えていますね。独立行政法人化を目前に控えて、何か「売り」を作らなければならない。

この問題を解決する方法があります。大学のシンクタンクを作ったらどうでしょうか。そのシンクタンクが大学づくりのアイデアを調査、分析、提案していくのです。

シンクタンクの構成メンバーは行政、経営に明るい教員を長にして、有志の学生を研究員として募り、そのシンクタンクの仕事自体をゼミにしてしまうのです。大学自体を教材にしまうのです。考えてみてください。大学に一番多く存在する人材としての資源、それは学生です。その資源

をなぜ有効に使わないのですか。学生を資源と表現すると嫌な顔をする人がいるかもしれませんが、この資源とされる学生にも、一方で得るものがあり、損にはならないでしょう。大学を変えるために社会を観察し、いろいろなことに会ううちに、教養を、また学際的な知識を獲得できるのです。そしてなによりこのシンクタンク自体が、学生が、自主的に、自立的に、大学をそして社会を変えていく学びの場になっていきます。

突然の提案で驚いている方がいらっしゃるかもしれません。しかし、このような方法こそが、大学が学生の Autonomy を育てる上で、最良の方法なのだと思います。このシンクタンクを作るということは新しい「学びの場」を作るとのことです。この「学びの場」を作るという方法。この方法は、見た目はそれほど斬新な方法には見えないかもしれませんが。しかし、このような「学びの場」こそが、Autonomy を持った人を育てる上で重要なのです。

Autonomy を会得する一つの方法として、自己決定で成功したという成功体験を積むことが挙げられます。この「学びの場」では、自己決定する機会を提供するのです。シンクタンクの仕事では失敗もあれば、成功もあるでしょう。まずは、温かく見守ってください。自由な発

想でアイデアを提案する場を提供してみてください。失敗から何かを学べるように、それでいて、失敗を恐れないように、そして成功を喜べるように、のびのびと活動させてみてください。自分の意見を言う喜びを自分の意見が現実化していく喜びを体験させてみましょう。この「学びの場」で成功したという体験から、次も何かを自己決定しようという動機づけを得ることができるのです。

また、このような「学びの場」では、いろいろな考えや価値観を持つ人と触れ合う機会も提供できます。いろいろな価値観とぶつかり、認め合って、ほかのひとの考えや行動に対する寛容さが生まれてくる、そして、独りよがりではない、周りの人にとって、そして自分自身にとって価値のある自己決定ができるようになるのです。そして、このようなところから、健康も含めた社会に対する Autonomy は生まれてくると確信しています。なにより「筑波大学はあなた自身が創るのです」なんて、カッコいいではないですか。そして、楽しそうではないですか。大学の新しい「売り」になると思いませんか。

このシンクタンクのアイデアは住民参加による地域づくりから来ています。

住民参加による地域づくり。その本質はプロジェクトを成功に導くということでは

なく、失敗を繰り返しながらも、参加者が成長していくことにあるのだと思います。住民参加による地域づくりは、インフラづくりではなく、「ひとづくり」なのです。そして、この「ひとづくり」ということ、これは大学に課せられた使命でもありますね。この「ひとづくり」という使命も果たせるかもしれません。「大学づくり」が「ひとづくり」へとつながるのです。

大学を変えよう・そして、国を変えよう

さて、このようなシンクタンクはその後、どのような影響を与えていくのでしょうか。このシンクタンクを通して育ったひとは、その後、どのような人になるのでしょうか。僕には未来なんてわかりません。ただひとつ言えることは、今までと違うことをするのだから、もしかしたら、今までとは違うようなひとが生まれてくるかもしれないということです。大学を変えたことを生かして、日本という国を、また世界を変えるようなひとが生まれてくるかもしれません。日本が Autonomy のある国になるかもしれません。これは僕の高望みでしょうか。少なくとも今と比べてマイナスにはならないとおもいます。なぜなら、教育に成功はあっても失敗はないのですから…。

学長、どう思われますか？

(のだひろゆき 新医学専攻)